

(様式1)

令和7・8・9年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(1年次)【中学校】

【学校名等】

学校名	福知山市立成和中学校							校長名	濱中 孝之
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援				生徒数	1 9 8 名
学級数	2	2	2	2					
事業担当教員名	塩見 勇太郎								
① 中学校区で目指す子ども像	「自ら考え、よりよくつながり、挑戦し続ける子」								
② 目指す子ども像	「自ら考え 仲間とつながる チャレンジ成和」 ○将来を展望し 自ら学ぶ生徒(知) ○自他を大切にし 仲間とつながる生徒(徳) ○健康でたくましく 挑戦し続ける生徒(体)								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	本校の生徒は、落ち着いて授業に参加したり、無邪気に明るく仲間と関わったり、行事に意欲的に取り組むことができる。その一方で、家庭学習時間の不十分さもあり、基本的な学習内容が未定着な生徒が多い。また、人権感覚の低さや、新たな人間関係を構築することへの弱さ、コミュニケーション不足による対人トラブルや集団不適応による不登校生徒数も増加傾向にある。また、自分自身で目標をたて、新たな挑戦に前向きに取り組むことや、難しい課題にあきらめずに向き合う意欲が弱い。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	○将来を展望し 自ら学ぶ生徒(知) ← 【自己調整】 ○自他を大切にし 仲間とつながる生徒(徳) ← 【思考の柔軟性】 ○健康でたくましく 挑戦し続ける生徒(体) ← 【チャレンジ精神】 3つ【自己調整、思考の柔軟性、チャレンジ精神】の非認知能力を重点的に高めることが、認知能力を高めることにもつながり、結果として目指す子ども像に近づくと仮定し、3つの非認知能力を高めることにつながると考える実践を全校体制で意識的に行う。 【自己調整】 全校体制で毎週の振り返りシート(夢ログ)、毎日の自主学習ノート(夢ノート)に取り組み、現状に対する目標設定や行動を自己決定する習慣を身につけさせる。また、授業では振り返りに重点を置き、課題に対しての自己分析の場を繰り返し設定する。 【思考の柔軟性】 日常や授業で対話する場面や協働する場面を多く設定し、他者の意見を聞き合う環境を意図的につくる。また、多様性を認め合い、自立し自走する学級経営や人権教育について研修し、自己の意見を伝える基盤となる心理的安全性を高めていく。 【チャレンジ精神】 日常や授業で質の高い課題を設定し、あきらめずに思考をし続ける生徒の育成に努める。また、授業者は、子ども同士をつないだり、子どもが見つけた問いを全体にもどしたりするファシリテーターとしての役割をにない、学習者を授業に引き込む。								

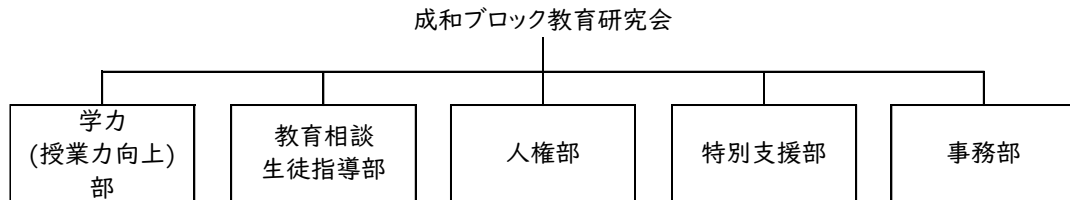
令和7年5月1日現在

【 1 研究主題】

『認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業づくりの推進』
～自ら学ぶ・仲間とつながる・挑戦し続ける生徒の育成を目指して～

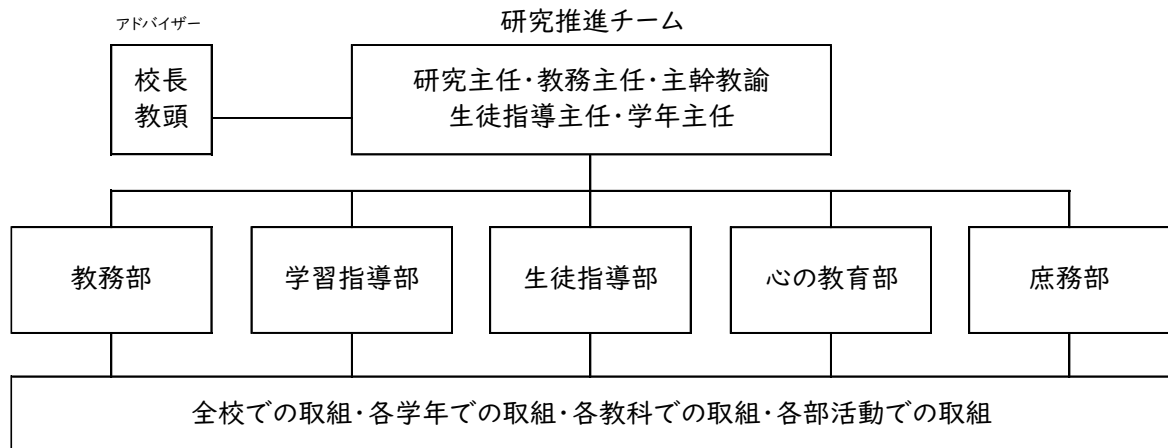
【 2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



- ①成和ブロックは、成和中学校、修斉小学校、上豊富小学校で構成する。
②年 3 回ブロック共通の課題を共有化し、その解決に向けて共通して取り組める手立て等を検討する。

(2) 校内の組織体制



【 3 研究計画・具体的な取組内容】

実 施 月	研究内容、研究方法、成果の公開 等
4 月	
5 月	5 月 23 日 ＊全教職員で本事業の趣旨と本校の取組の方向性を共有
6 月	
7 月	校内授業研・事後研① 7 月 31 日 PM ブロック 夏季研 ※講師希望
8 月	8 月 4 日 ＊学びのパスポート結果返却、第 1 回分析・活用研修会 校内研（仮題）「非認知能力の見取り方や具体的手立てを考える視点について」 ※講師希望
9 月	
10 月	10 月上旬 ＊第 2 回分析・活用研修会
11 月	校内授業研・事後研②
12 月	
1 月	＊研究校交流会（予定）
2 月	校内授業研・事後研③
3 月	

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全学年	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	
全学年	44	自分の思いやしたいことだけでなく、相手の思いやしたいことも考えながら行動するほうだ。	思考の柔軟性	
全学年	53	失敗をおそれず、前向きに取り組むほうだ。	チャレンジ精神	
全学年	56	まわりに左右されることなく、自分を出せるほうだ。	自分らしさの発揮	
全学年	59	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	心理的安全性	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法 ・低学力層や不登校危惧生徒に教師が積極的に関わりをもち、「自主学習ノート（夢ノート）」を活用した基礎学力学習のやり取りや学習会の活用を進めていく。 ・自己調整やメタ認知が低い生徒に振り返りシートや小テストなどの適切なフィードバックの機会をもち、スモールステップで成長や自信の向上につなげる。
集団としての具体的な指導・支援方法 ・自己調整力やメタ認知を高めていく必要があり、そのために各教科や授業での「振り返りの質」を高める。 ・「振り返り」を充実させるためには、目標設定や問いにこだわる必要があり、「課題の質」を高める。 ・課題設定から振り返りまでの過程の中で、自己対話、教材との対話、仲間との対話を大切にし、「対話の質」を高める。 ・毎週の振り返りの「個人の学習計画（夢ログ）」の質を向上させ、適切な目標設定や振り返りを継続させることで、自己調整力を高め、家庭学習である「自主学習ノート（夢ノート）」の質や家庭学習時間の向上につなげる。 ・ベースとなる心理的安全性を高めるために、人権教育、及び学級経営力を高めていく。

【8 仮説の修正】

【追記】 「将来を展望し 自ら学ぶ生徒」 ・自己調整力を発揮し、主体的に学ぶ学習者への成長のためには、学校生活や全ての教育活動に対して、自分ごととし、社会（学校）参画できる生徒の育成を目指す必要がある。 「自他を大切にし 仲間とつながる生徒」 ・思考の柔軟性を働かせ、表層理解にとどまらず、深く本質を追究する学習者への成長のためには、互いを対等な存在と認め合い、たえず対話による合意形成を目指す、相互承認ができる生徒の育成を目指す必要がある。 「健康でたくましく 挑戦し続ける生徒」 ・チャレンジ精神をもち、諦めず、深く学び続ける学習者への成長のためには、教師自らが既習事項や知識、情報をつなぎ合わせ、精緻化できる課題を設定し、生徒自身の探求を促すような授業デザインができるファシリテーターとして、成長する必要がある。

【9 具体的な取組内容の修正】

- ・全ての取組を、生徒が主体的に意見を出し合い、対話が生まれ、目的や本質を追究する姿が見られるように改変する。
- ・授業研究は、「深い学び」とは何かを追求し、そうなるような工夫や手立てを共有していく。
- ・総合的な学習の時間とも連携し、学校体制（全教職員）で教科横断的な取組や研究とする。
- ・総合的な学習の時間、学活、道徳では、目的から活動の必要性を判断し、カリキュラムマネジメントの視点で新しい年間計画を作成していく。

【10 生徒の変容（普段の様子から）】

- ・基礎学力が未定着な生徒へ具体的な学習支援（個別のプリント学習など）を行うことで、少しずつではあるが基礎基本の定着が見られた。また、自分の力で課題を解決するためにスモールステップを設定し、1つ1つのステップに対して丁寧に指導・支援したり、班や隣の仲間が支援したりすることで今まで取りかかることすらできなかった生徒が、解決までは到達しなくとも自分の力で途中まで考えることができるようになった。
- ・自主学習の取組（夢ノート）や毎週の振り返り（夢ログ）を通して、自分の家庭学習スタイルの確立を図り、どのように学習をすればよいかの具体例の提示や個別指導を行うことで、家庭学習の質や学習時間の向上がみられた。
- ・振り返りの機会を多く設定することで、スモールステップで自身を振り返ることができ、新たな目標設定や課題設定を主体的に取り組む様子がみられた。
- ・課題の質を高めることで、効果の高いグループ学習に発展し、あきらめずに課題に取り組み、対話のある学び合いがみられた。

【11 2年次の研究構想】

- ・年度当初に全教職員及び全校生徒、保護者とともに目指す学校像や生徒像を確認し、共通認識をもてる時間を確保する。
- ・非認知能力を認知能力の向上につなげるため、それぞれの学力層に応じた学習内容を振り返ったり、基礎的な学習を反復練習したりするシステムを各教科で構築し、実践する。定期的に確認テストや単元テスト等で、定着度合いについて検証し、学力定着に向けてのよりよい方法を模索していく。
- ・夢ログや夢ノートの目的や意義を確認し、自己調整や振り返りの質を高めるための手段を改良していく。
- ・「深い学び」とは何かを全職員で追求し、そのための取組や授業デザインを検証し共有することで、日々の授業改善や実践につなげる。
- ・自己調整力を発揮し、主体的に学ぶ学習者への成長のために、学校生活や全ての教育活動に対して、自分ごととし、社会（学校）参画できる生徒の育成を目指す取組（研究）をすすめる。
- ・思考の柔軟性を働かせ、表層理解にとどまらず、深く本質を追究する学習者への成長のためには、互いを対等な存在と認め合い、たえず対話による合意形成を目指す、相互承認ができる生徒の育成を目指す取組（研究）をすすめる。